

＜論 文＞

IAML の R-Projects に学ぶ MLA 連携

松下 鈞

近年、MLA 連携に関する論議が盛んになってきた。MLA 連携の動きは、情報のデジタル化とインターネットに象徴される、いわゆる情報通信革命が引き起こしたと理解されている。しかし、音楽分野においては情報通信革命以前から、歴史的音楽資料の所在目録を作成することを目的とする、M・L・A と学術コミュニティとの組織的な国際共同事業、RISM と RiDIM が行なわれている。本稿では RISM と RiDIM の成立過程と活動概要とを紹介し、その観点から我が国における MLA 連携について考察する。

はじめに

2009年12月、アート・ドキュメンテーション学会創立20周年記念の研究フォーラム「MLA 連携の現状、課題、そして将来」¹⁾が開催された。そこには、所蔵資料のデジタル化を進めている慶應義塾大学、国立国会図書館、国立公文書館、東京国立博物館からパネリストが参加し、我が国における MLA 連携の動きを総覧するディスカッションが行われた。

MLA とは、希少価値のあるモノ資料を所蔵する M [博物館] と、大量に複製、流通している図書資料を中心に所蔵する L [図書館] と、その中間にあって使用済の業務文書、図面、報告書、灰色文献等を所蔵する A [文書館] (手稿や写本、手稿の断片等の紙媒体資料、録音・映像資料を扱う資料館[史料館]が含まれる) のことで、これらの違いを踏まえた上で、情報デジタル化が MLA 連携を促進させているとの共通理解があった¹⁾。

情報のデジタル化の進展する中で、我が国における MLA 連携の取り組みが遅れている原因について、田窪は、“欧米では、文化(遺産)セクターという観点から、博物館、図書館、文書館がひとくくりで扱

われる”のに対し、我が国では、“社会教育という観点から、博物館、図書館、公民館がひとくくりで扱われる”ことにある、と指摘している²⁾。これに加えて、図書館、博物館、公文書館の依拠する法的基盤の違いが MLA 連携の壁となっている点も指摘できると思われる。パネル・ディスカッションで八村は、デジタル化、ネットワーク等の技術的な問題より、MLA 連携を実現させる人的資源の養成、政策化の必要性、利用者の視点での捉え直し、利用者の開拓等の重要性を指摘した³⁾。MLA のそれぞれの組織運営に携わる人々と利用する人々間の認識の違いが連携を阻む心理的な壁となっていることも予想される。

本稿では、音楽分野ではデジタル化の進展以前から行なわれている IAML (International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centers 国際音楽資料情報協会) の国際ジョイント・プロジェクト (R-Projects) ⁴⁾ のうち、RISM (Répertoire International des Sources Musicales 国際音楽資料目録) と RiDIM (Répertoire International d'Iconographie Musicale 国際音楽図像目録) について、MLA 連携の視点から紹介する。また、我が国の MLAJ (Music Library Association of Japan 音楽図書館協議会) 加盟機関における MLA 融合⁵⁾について述べる。さらに、それらを概観したうえで、我が国にお

2010年2月1日受理

まつした ひとし 帝京大学総合教育センター

ける今後のMLA連携の方法論について触れる。

1. 音楽資料・情報の特性

「音」には、自然界の発する音、人間が、自分自身を含め、発音体を用いて発する音（音の無い静寂な時間も含む）がある。「音楽」とは、人間が、音の高低、長短、強弱、表情、発音体などの要素を意図的に組み合わせる組織化したものである。音楽資料・情報とは、人間が意図的に組織化した音を何らかの媒体に、なんらかのシステムを用いて記録したものである。音楽を記録するシステムと記録媒体には地域性、時代性、特異性による変遷があるが、媒体に記録された音楽情報を再生するシステムを用いれば、元の音楽情報を再現することができる。ただし、記録媒体が人の目に触れない場合もある。それは人間の頭脳に記録される場合で、口承伝承はこれにあたる。チャールズ・シーガー（Charles Seeger）によれば、組織化された音の記録法（記譜法）には、

「このように演奏しろ」（Prescriptive Music Writing）と「このように演奏されていた」（Descriptive Music Writing）の2種類がある⁶⁾。前者は作曲であり、後者は採譜である。

ここでは前者を取り上げて考えてみよう。作曲家はなんらかの刺激、イマジネーションを得て音の組織化を試みる。作品として完成するまでには多くのメモ、スケッチなどの断片が残される。例えば、武満徹（1930-96）は作曲の過程で浮かんだ音、響き、構造のイメージを文字、数字、図形などでスケッチブックに書き込んでいる⁷⁾。作曲とは音の時間的変異を組織化して記録するだけでなく、旋律に響きと色彩的イメージを与えることでもある。断片的なイメージは次第に作品として収斂し、姿を表す。組織化された音楽作品の全体構造は、五線式記譜法やそれに代わる記譜法で書き記されている⁸⁾。さらに、言葉など音譜以外の方法で表現が補われる場合もある。作品の全体像は手稿楽譜として完成する。完成した作品は必要に応じて演奏楽器のパートごとに写譜され、演奏され、作曲家の思い描いた作品のイメージは現実の音として再現される。

1.1 音楽作品と音楽資料の生成

歴史的にみると、特定の場所（教会）、時間（典礼暦）、目的（礼拝）のために作曲された音楽作品も多い。例えば、バッハ（Johann Sebastian Bach）の

教会カンタータはその典型である。作曲された作品のすべてが印刷され、流通するのではない。多くの場合、作品は手稿譜、写譜のまま演奏され、その作品は手書きのまま作曲家の手元、あるいは演奏者、演奏会場、演奏団体、放送局などに残される。時間を経て、希少価値が高まれば、古書店、博物館、音楽史資料館、図書館、個人コレクターの元に集められることもある。音楽作品は、刊行費用が賄え販売益が見込まれる場合に、印刷楽譜として刊行されるというのは古今東西変わらぬ傾向である。つまり、我々が普段、楽譜として認識している印刷楽譜は、完成された音楽作品の氷山の一角であるといっても過言ではない。

音楽作品は楽譜資料として存在する他、演奏が記録され、録音・映像資料の媒体としても存在する。楽譜に記録された作品という情報は演奏によって再現されるが、録音、映像資料に記録された情報は再生装置という機器によって再現される。音楽を記録するシステムとしての記譜法に歴史的な変遷があるように、録音・映像資料の記録・再生メディアにも歴史的な変遷がある⁹⁾。過去の媒体に記録された情報はその情報を再生する装置がなければ再現は不可能である。したがって録音・映像情報は媒体と再生装置と合わせて保存されなければならない。

1.2 派生する音楽資料

作曲と演奏の成立過程で派生する資料や情報について考えてみよう。作曲家は作曲の過程で、作品に関わるさまざまな情報を生成している。日記や書簡には作曲家の作品に対する考え、作品そのものに関する情報、作品の成立過程に関わる情報が記録されることがある。モーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart）の書簡集や日記が後世の研究者から重要視されるのは、そこに作曲家とその周辺の人々の生活、作品成立に関わる情報、時代精神等が記録され、それらの情報が人物研究や作品研究の手がかりとなるからである。

また、同時代の人々の記録した情報も重要である。演奏会を開けば、ポスター、チラシ等の告知資料、演奏家への支払い記録、プログラム、演奏会評などが制作される。これらは図書のように形が整った情報ではなく、文書、パンフレット、ポスターのような不安定な情報媒体である。作曲家や演奏家のブロマイド、肖像画などの画像資料も作成されることがある。現代であれば、演奏会の記録が録音資料、映

像資料として意図的に残される。

初演された土地で多くの人々から支持された作品は、他の都市での再演のため、全曲、抜粋、編曲の楽譜が筆写あるいは刊行される。例えば、モーツァルトの最晩年のジングシュピール「魔笛」(Die Zauberflöte)は、1791年のウィーンにおける初演から1799年までの9年間にヨーロッパ各地で多数の楽譜出版が行われた。ブリティッシュ・ライブラリーのOPACで検索すると該当資料は40種に上り、次のように刊行されている¹⁰⁾。ピアノ総譜(全曲のオーケストラ譜面をピアノソロに編曲し独唱、重唱、合唱パートを付して刊行した楽譜)(9種)、声楽曲(オペラのアリアを抜粋して刊行した楽譜)(13種)、器楽曲(オペラの全曲または抜粋曲を他の楽器に編曲した楽譜)(18種)、刊行年別では、1791年(8種)、1792年(4種)、1793年(4種)、1794年(5種)、1795年(13種)、1796年(2種)、1797年(2種)、1798年(2種)、1799年(0種)となっている。

作品は演奏家や音楽学者による楽曲分析や演奏解釈と演奏法等の付加情報を加えられ校訂版楽譜として刊行されることもある¹¹⁾。作品は、演奏法や演奏スタイルの時代による変化、演奏家(指揮者も含む)による表現法、演奏解釈の違い、演奏会場、機材の違い等による影響を受ける。そのため録音、録画された資料はどれひとつ同じものではない。

以上のことから、音楽資料・情報はさまざまな要因により時間の経過とともに複層的に増殖してだけでなく、音楽作品に関連する資料も媒体も多様化していく特性を持っている。そのため、音楽作品と関連する資料・情報を所蔵する機関は、博物館、図書館、文書館(資料館)、演奏会場、出版社など多様である。

2. 音楽書誌学と音楽図書館

欧米においては音楽書誌学者と音楽史博物館、音楽図書館、歴史資料館との間には深いかわりがある。19世紀から20世紀初頭にかけては、音楽書誌学者や音楽図書館員による手稿楽譜、初期印刷楽譜等の原典資料の収集、所在確認、書誌学的検証に基づいた作曲家作品全集や楽譜叢書の刊行が相次いだ時代である。また、この時期のヨーロッパにおいては、M・L・Aを巻き込む音楽書誌学的な動きが見られる。この時代に活躍したアイトナー、キンスキ

ー、シュミーダーの人と業績について簡単に触れる。

2.1 Quellen-Lexikon

ローベルト・アイトナー(Robert Eitner, 1832-1905)は独学で音楽を学び、幅広い分野で活躍した音楽書誌学者、出版編集者でもあった¹²⁾。1867年、「オランダ作曲家事典」¹³⁾の編纂で賞を受けた翌年、世界初の音楽研究協会(Gesellschaft für Musikforschung)¹⁴⁾を設立した。協会からは「音楽史研究論集」¹⁵⁾の創刊に続き、1873年から32年間にわたって、それまで刊行されなかった初期音楽の楽譜や理論書など全29巻からなる叢書¹⁶⁾を刊行した。このような継続的な調査研究の成果として、アイトナーは、「16～17世紀音楽コレクション目録」¹⁷⁾、「キリスト教時代から19世紀半ばまでの音楽家・音楽学者の伝記及び作品原典事典」¹⁸⁾(以下、Quellen-Lexikonと言う)を刊行した。これらは初期の音楽史原典資料所在目録とも言うべき労作で、所在調査に基づく初期音楽の印刷楽譜のタイトル、内容及び所蔵機関が明示されている。アイトナーが所蔵調査の対象とした機関は13カ国、224の国公立の図書館、文書館、修道院・教会、出版社の資料室等である¹⁹⁾。

Quellen-Lexikonには19世紀までに活躍した多数の作曲家の人物情報が掲載されている。Quellen-Lexikonは現在から見れば、調査方法、対象と範囲、記述方法等に問題があるが、音楽書誌学の揺籃期の業績として音楽界や図書館界に与えた恩恵と影響は多大なものであった。現在でも、最近の音楽事典では扱われていない20世紀以前のマイナーな作曲家の人物情報はQuellen-Lexikonの項目に依ることもある。Quellen-Lexikonを補完するものとして、「15～19世紀音楽出版史」²⁰⁾、「楽書楽譜商と音楽出版社」²¹⁾、「Quellen-Lexikon補遺」²²⁾などがある。これらから音楽図書館員や音楽書誌学者の関心が資料の所蔵から出版と出版社に向けられたことが推測できる。

2.2 ふたつの作曲家作品目録

作曲家の作品資料の書誌学的研究に基づく作品目録の編纂は、19世紀末の時代精神とアイトナーの業績の恩恵による音楽書誌学的成果のひとつである。

ベートーヴェン(Ludwig van Beethoven)の作品目録を編纂したキンスキー(Georg L.Kinsky, 1882-1951)は楽譜店と古書店で働きなが

ら、独学で音楽学を学び、プロシア国立図書館（Preußische Staatsbibliothek oder Königliche Bibliothek）の司書、ケルンの音楽史博物館（Musikhistorisches Museum Wilhelm Heyer）の学芸員として活躍した。ベートーヴェンの作品目録の他にキンスキーの成し遂げた業績に「目で見える音楽史」がある²³⁾。これは後述する音楽図像学の先駆的業績でもある。

BWV番号で知られるJ. S. バッハの作品目録を編纂したシュミーダー（Wolfgang Schmieder, 1901-1990）はハイデルベルク大学で音楽学、美術史、哲学等を学び、ザクセン州立図書館、ライプツィヒ大学図書館で図書館学を学んだ後、専門図書館管理者試験に合格し、さらに印刷楽譜の扱いに関する検定試験にも合格した。その後、ドレスデン技術学校の司書を経て、ライプツィヒの歴史ある音楽出版社、ブライトコップフ（Breitkopf und Härtel）社の資料館長に就任し、さらにフランクフルトの市立・大学図書館に音楽部門を設立した²⁴⁾。

アイトナー、キンスキー、シュミーダーの3人の業績が博物館、図書館、資料館等の所蔵機関に組織的なMLA連携の動きを引き起こした訳ではない。しかし、音楽史学や音楽書誌学においては研究の目的と方法を定めると、研究に必要な証拠資料あるいは研究対象資料がどこに所蔵されているかが、所蔵機関の種別は問わない、という意味で、デジタル化の潮流の中で起こりつつあるMLA連携と似たところもある。

19世紀は音楽書誌学の世紀と言えるだろう。メンデルスゾーン（Felix Mendelssohn Baltholdy, 1809-47）によるバッハのリヴァイヴァル²⁵⁾はその象徴である。初期音楽原典資料の探索と作品の再評価の流れは、音楽書誌学を興隆させ、バロック期以降の作曲家個人全集や楽譜叢書とその学術校訂版（Kritischer Bericht）が盛んに刊行された。19世紀半ばから20世紀初頭のヨーロッパでは音楽美学や音楽哲学の学位を得ても大学には音楽学の教員の口が無く、音楽学者が図書館、文書館（音楽史博物館）、音楽出版社等に職を得た背景も見逃せないだろう²⁶⁾。

3. IAMLのR-Projectsについて

IAML²⁷⁾は第二次大戦によって散逸した音楽文化財の現在の現状把握と人材養成、資料交換などを行

なうため国際協力を推進し、音楽資料の扱いに関する国際標準化を目的として構想された、音楽図書館の国際組織である。1949年10月、フィレンツェで開催された第1回会議（Premier Congrès des Bibliothèques Musicales）にはアメリカとオーストラリアを含む欧米12カ国からおおよそ60人が参加した。参加者は音楽図書館員のほか、音楽学者、学芸員たちであった。1950年、リューネブルクでの第2回会議を経て、1951年、パリにおいて正式に発足した²⁸⁾。同時に、本来の目的であったIAMLとIMS（International Musicological Society 国際音楽学会）との国際ジョイント・プロジェクトRISMがスタートした。

その後、IAMLはRISMに続くIMSとのジョイント・プロジェクトとして、1967年、各国で刊行される音楽資料の目録作成を目指したRILM²⁹⁾をスタートさせ、さらに1971年、ICOM（International Council of Museums 国際博物館協会）を加えたジョイント・プロジェクトRiDIM³⁰⁾を開始した。1987年には1800年以降の音楽雑誌の総索引を目指したRIPM（Répertoire International de la Presse Musicale 国際音楽雑誌目録³¹⁾）をスタートさせている。IAMLでは、RISM、RILM、RiDIM、RIPMの4つの国際ジョイント・プロジェクトをR-Projectsと総称している。

3.1 RISMの成立

RISMは1951年、IAMLとIMSによって組織された国際ジョイント・プロジェクトである。当初の目的は第二次世界大戦によって散逸した音楽史原典資料の所在調査を行い、その結果をもとに新たな所在目録を作成することであった。

1949年、バーゼルで開催された大戦後初のIMS総会ではハンス・アルブレヒト（Hans Albrecht）が戦争で散逸した音楽史資料の所在調査プロジェクトを設置する提案を行った。ほぼ同時期、フィレンツェで開催された国際音楽図書館会議（IAML結成前）においてフェドロフ（Vladimir Fedorov）が同様の提案を行った³²⁾。音楽学者のフリードリッヒ・ブルーメ（Friedrich Blume）は、これらのふたつの提案をもとに両団体が翌年の総会において検討することを勧めた。その結果、1950年のリューネブルク会議を経て、1951年、パリのUNESCO本部で開催された新生IAMLの第1回総会において、IMSとの国際ジョイント・プロジェクトRISMにゴーサ

インが出された。

この時代、音楽図書館界と音楽学界は共通の問題を抱えていた。それはかつて音楽史研究の必携資料であったアイトナーの *Quellen-Lexikon* によりヨーロッパ各地の図書館、博物館、資料館等での所在が把握されていた音楽の歴史的原典資料が、第二次世界大戦の戦禍で散逸し、その後の所在確認ができなかったことである。

フィレンツェで行なわれた第1回会議では、次の3点が論議された³³⁾。a) 第二次世界大戦後に残されている音楽の歴史的原典資料の所在調査を行うこと。b) 所在が確認された原典資料は将来の保存と利用のためマイクロフィルム化を進め、研究目的であればマイクロフィルムの複製を提供するセンターを各国に設けること。c) *Quellen-Lexikon* に代わる所在目録の編纂を検討すること、である。

RISM は音楽史研究のために、M・L・A で働く図書館員と音楽学者が協力し、第二次世界大戦を潜り抜けた原典資料を、所蔵機関の如何に関わらず調査確認し、それらのマイクロ化を進め、新たな所在目録を作成するという共通の目的をもってスタートしたのである。目的を達成するため、IAML、IMS 双方8名から成る合同委員会が設置された³⁴⁾。1952年、まず RISM プロジェクトが具体的な活動をスタートさせた。

3.2 RISM プロジェクトの概要

RISM は、全世界の図書館、古文書館、博物館、修道院、教会、個人コレクションに所蔵されている歴史的原典資料の調査に基づく資料目録である。1800年以前の手稿、初期刊行の楽譜、理論書やギリシャ、アラブ、東洋など音楽文化の背景や歴史や言語の異なる地域の音楽資料の記述は、現代の図書館界で使われている目録フォーマットとは異なることから、RISM 本部では検討委員会を設けて RISM 目録フォーマットを定めた。その後、オンライン目録に備えて MARC21 や UNIMARC、MAB の記述フォーマットを基に必要なフィールドを加えた RISM フォーマットと、それぞれの MARC との対照表も作成された。

RISM は Series A と B に分けられている。A は作曲者や編纂者の名前で目録作成が可能な 1800 年以前の印刷楽譜、手稿譜を対象としている。B は年代別、国別、主題別で編纂された 1800 年以前出版の曲集、11-16 世紀の音楽や理論書の手稿、ビザン

チン、インド、中国、日本、アラビア諸国の固有な音楽資料などを対象としている。目的を実現するため、プロジェクトに参加する各国に国内委員会を置き、委員会あるいは指名された個人が、対象資料の調査を行い、情報を集め、カタログ化したデータを本部に送ることになった。本部ではそのデータを検証、評価し、冊子体目録を編纂刊行する、という方式で行われた。

RISM プロジェクトの構成を以下に示す。A-1 1800年以前の個人作曲家の印刷譜、A-2 1600年以降の手稿譜、B-1/2 16世紀～18世紀に刊行された曲集、B-3 カロリング朝時代～c 1500年までの音楽理論の手稿本目録、B-4 11世紀～16世紀のポリフォニー音楽の手稿譜、B-5 トローペとセクエンツィアの手稿譜、B-6 音楽書の出版目録、B-7 15世紀～18世紀のリュートとギターのタブラチュア手稿譜、B-8 ドイツ教会讃美歌、B-9 ヘブライ音楽に関する原典資料、B-10 c 900年～1900年のアラビア音楽理論書、B-11 古代ギリシャ音楽理論(図録)、B-12 ペルシャ音楽関係写本、B-13 未定、B-14 行列聖歌の写本、B-15 c 1490年～1630年のスペイン、ポルトガル、ラテンアメリカのポリフォニー・ミサである。所在調査の結果に基づくこれらの目録は順次刊行されている。RISM Series A については、現在までにおよそ70万件の1800年以前の手稿、出版物が登録され、RISM-OPAC で検索することが可能である³⁵⁾。因みに我が国からは国立音楽大学附属図書館が400点の写本を登録している。なお、IAML 日本支部から日本音楽学会、東洋音楽学会に対して、RISM 日本支部結成の打診が行なわれたが、現在までのところ日本支部結成には至っていない。

3.3 RISM の成立

3.3.1 音楽図像学

1929年、ベートーヴェン作品目録の編纂者キンスキーは「目で見る音楽史」³⁶⁾を刊行した。音楽史上に現れる人や事物を文字だけでなく図像を用いて説明しようとする試みとしては、決して初めてのものではなく、プレトリウス (Michael Praetorius, 1571-1621) は「音楽大全」(1614-20) で図解を用いて楽器や理論などの解説をしている³⁷⁾。また19世紀初頭、ラヴィニャック (Albert Lavignac) の音楽百科事典には多くの写真や図版が使われている³⁸⁾。

音楽図像学 (Iconography of Music) の概念が音楽事典に登場したのはリーマンの音楽事典で³⁹⁾、音

楽史の項目に音楽図像学（*musikalische Bildkunde*）の記述がある。音楽図像学が音楽事典の見出し項目として取り上げられたのは、RIdIMのジョイント・プロジェクトがスタートした1971年よりも後の1980年に刊行された「ニューグローヴ世界音楽大事典」である⁴⁰⁾。ここには美術作品の理解に必要な3つのレベルを提唱したパノフスキー（Erwin Panofsky, 1892-1968）の図像学解釈の理論も紹介されている⁴²⁾。

音楽学者の視覚資料への関心は1907年のフーゴ・ライヒテントリット（Hugo Leichtentritt）⁴³⁾、1910年のシュールラー（Daniel F. Scheurleer）⁴⁴⁾など20世紀初頭の論考に見られるが、音楽図像の目録作成について触れたものは1953年のアルバート・ヘス（Albert C. Hess）の問題提起が最初の文献である⁴⁵⁾。

3.3.2 RIdIMの成立と活動

RIdIMはIAMLとIMSとICOMのCIMCIM（International Committee for Museums and Collections of Musical Instruments 国際楽器博物館委員会）⁴⁶⁾とのジョイント・プロジェクトとして、1971年、ザンクトガレンで開催されたIAML総会で正式に設立された⁴⁷⁾。IAMLのヘックマン（Harald Heckmann）、IMSのブルック（Barry S. Brook）、ICOM=CIMCIMのティボー・シャンビュール（Genevieve Thibault de Chambure）ら提唱者たちの意図したところは、世界各地の美術館、博物館、図書館、教会、修道院等の収蔵資料や歴史的建造物などに描かれている音楽家、楽器、演奏シーンなどあらゆる音楽図像を調査して資料目録を作成し、それによって音楽解釈学の枠組みを構築することにあつた。また、RIdIMは音楽図像資料の記述法、分類法、研究のセンターとして、音楽図像学の方法論、技術論、研究を発展させることを目的としていた。さらにRIdIMの成果を演奏家や歴史家、図書館員、楽器製作者、レコード製作者、出版者等の学術的、実践的利用を助けることが念頭に置かれた⁴⁸⁾。

RIdIMはRISM、RILMなどそれまで発足したIAMLの国際ジョイント・プロジェクトに倣って、参加する各国に国内委員会やセンターを設け、国ごとの活動を推進すると同時に、国際本部に音楽図像のデータカードを集めてRIdIM（国際音楽図像目録）を作成する、というシフトを組み上げた。また同時に、ギリシャの花瓶、中世の壁画、楽譜の表紙、

雑誌の挿絵に描かれた楽器や音楽シーン、音楽家の肖像、西洋と東洋との楽器の出会い、18世紀の合奏シーン、太鼓と鼓手などいくつかの特定の共通テーマを設けて情報を網羅的に収集するプロジェクトも進行させた。

RIdIMではRISMやRILMとは異なる紙媒体以外の3次元資料の目録データを作成するための困難に直面した。楽器の分類法については、1914年に発表されたザックス（Curt Sachs, 1881-1959）とホルンボステル（Erich Moritz von Hornbostel, 1877-1935）による楽器分類法が現在でも広く普及している⁴⁹⁾。しかし、さまざまな時代、地域、文化背景を持つ多様な形態の音楽図像を、共通の目録法によって記載することには大きな困難を伴った。音楽研究者からは、作者名、タイトル、製作地、素材、サイズ、所在地、その図像の視覚情報が掲載されている図書または写真、予備知識なしに理解できる十分な情報、その図像情報にはどのような情報が含まれているのか（例えば、どのような楽器が用いられているのか、演奏する際の規模、どのような場面で演奏されているのか等）など解析した情報が求められた。そこでIAML、IMS、ICOMのメンバーから構成された企画委員会、博物館、図書館、美術史学者、楽器コレクター、コンピュータの専門家から構成された諮問委員会、各国のプロジェクト責任者から構成された調査ワーキンググループが設置された。そこでの検討結果をもとに、1972年、RIdIMマスターカードの仕様が決められた⁵⁰⁾。

こうした活動は、提唱者のシャンビュールがパリ⁵¹⁾に、ブルックがニューヨークにそれぞれ音楽図像センターを設けて行なわれていたが、シャンビュールの死後はニューヨーク市立大学のRCMI（Research Center for Music Iconography 音楽図像学研究所）に移され、現在はロンドン大学の音楽研究所を中心として進められている。我が国では1988年、東京で開催されたIAML大会を機にIAML日本支部会員の図書館員、音楽学者を中心とする私的研究会が結成され、日本音楽学会、東洋音楽学会に対する打診が行なわれたが、国内委員会を設けるまでには至っていない。

RIdIMは現在でも3団体からそれぞれ3名の委員で構成されており、委員長にはIMSのアントニオ・バルダサル（Antonio Baldassarre）、副委員長にICOMのアーノルド・マイヤーズ（Arnold Meyers）、事務局長をIAMLのポール・バンクス（Paul Banks）

が担当している⁵²⁾。

4. R-Projects に学ぶ我が国における MLA 連携

4.1 R-Projects の共通点

RISM と RIdIM はいずれも情報のデジタル化やインターネットに代表される近年の情報通信革新以前に音楽図書館界と音楽学界、そして博物館界との連携でスタートした国際ジョイント・プロジェクトである。ここに見られるいくつかの共通点を挙げてみよう。

1) 音楽に関する学会、図書館、博物館の国際組織との共同事業であること。

RISM は IMS と IAML, RIdIM は IMS, IAML と ICOM との公的なジョイント・プロジェクトとしてスタートし、その枠組みは現在も維持されている。

2) 研究振興を目的としていること。

RISM も RIdIM も音楽学研究的基盤整備（音楽史研究のため第二次世界大戦の間に散逸した歴史的音楽資料の所在を確認する）、新たな研究主題の模索（音楽図像学研究的振興）など音楽研究に必要な共通の資料や素材を整えるという目的がある。

3) 研究の対象資料あるいは素材を扱っていること。

M・L・A の扱う資料がそれぞれ異なることについては冒頭に述べたが、RISM, RIdIM はともに研究者が研究対象とする資料あるいは研究の素材に所在を調査し、その結果に基づいて目録を作成することを目標とするプロジェクトである。この目標設定が研究者の積極的な関与を促進するカギとなっている。

4) 個人の活動が組織を動かしていること。

IAML は図書館だけでなく、資料館、ドキュメンテーション・センターという機関を参加単位とした団体、IAML の実際的な活動を担う図書館員や音楽学者など、この分野の資料や活動に関心を持って参加する個人によって構成されている⁵³⁾。彼らは国内でも国外でも所属機関に縛られずに活動し、大きな影響力を発揮している。多くの国では、それぞれのメンバーが所属する機関やそこが参加する国内組織が個人の活動を支援する体制が組まれている。

5) 国や財団からの財政的支援だけでなく、自己資金を調達していること。

IAML の場合、国内支部に納入する年会費のうちのある部分が国際本部の活動資金として拠出される。国際本部では徴収した費用をもとに本部の運営と国

際的プロジェクトを進行する、という仕組みだが、それだけですべての経費が賄える訳ではない。そこで各支部では企業や団体から賛助費や広告費の提供を依頼し、国際本部では UNESCO, 各国政府、財団等からの資金的援助を得る努力をしている。また、出版事業により成果を普及させると共に収益をプロジェクトに充当している。

6) MLA 連携が成立していること。

存立基盤の異なる M と L と A とは前述した音楽資料・情報の特性と情報の生成過程から見ると、資料そのものの境界が曖昧でかつ重複したコレクションを保有している。それらの資料を研究者に提供するという観点から M と L と A は共同プロジェクトを編成し、プロジェクト全体のプランを策定し、該当資料を記録する目録フォーマットを決め、それぞれの機関が所蔵する該当資料の調査を行い、目録フォーマットに従ってデータを記載し、データベースを公開するプロジェクトを共同で推進している。

7) 情報通信技術や情報デジタル化はプロジェクト着手の動機ではないこと。

IAML の R-Projects の開始年は、RISM が 1952 年、RILM が 1966 年、RIdIM が 1972 年である。各プロジェクトとも開始時点では、アナログでのデータ収集と目録の刊行を目指していた。しかし、RIdIM は 1972 年当初から将来のデータベースの構築を視野に入れ、コンピュータ専門家を諮問委員会に加えていた。これらから見ると、情報のデジタル化とグローバル・ネットワークの進展が MLA 連携を促進する動機になっている訳ではない。

5. 我が国における MLA 融合・連携

5.1 MLAJ における MLA 融合

1971 年に創立された MLAJ (Music Library Association of Japan 音楽図書館協議会) の加盟団体は 2011 年 1 月現在、31 機関である⁵⁴⁾。その内訳は音楽大学または大学、短大の図書館や図書室が 24、公共・専門図書館または資料館が 7 である。これらの機関の所蔵資料を詳細に見ると、もっぱら L が 17、L+A が 5、L+M が 3、M が 1 機関である。

このように MLAJ 加盟機関の中には L と A、L と M の資料と機能を併せ持つ機関もある。しかし、これらは岡野が文学館に関して述べたように⁵⁵⁾、ひとつの図書館内部で M・L・A の機能が融合した組織である。国立音楽大学、武蔵野音楽大学、大阪音

楽大学⁵⁶、大阪芸術大学⁵⁷、東京藝術大学⁵⁸)には学内に博物館あるいはそれに類する施設が設置されているが、それぞれ図書館とは別組織として設置、運営され、図書館と博物館との間に組織的連携の動きは見られない。

5.1.1 MLA 融合の実際

LとAの資料を併せもつ機関としては国立音楽大学附属図書館⁵⁹、武蔵野音楽大学図書館⁶⁰などがある。国立音楽大学附属図書館は豊富な音楽の図書、楽譜、視聴覚資料のほか、西洋音楽の手稿譜等400点余りを所蔵している。手稿譜はRISMのデータベースに登録されている。ベートーヴェンの初版・初期刊行楽譜では世界的にみても有数なコレクションである。「ベートーヴェン初期楽譜目録」はインターネット上に公開されている⁶¹。また、近世三味線音楽に関する錦絵、台本、番付等の貴重資料も所蔵している。これらの貴重資料の一部はデジタル化され、オンラインで検索・閲覧が可能である⁶²。国立音楽大学には楽器学資料館(楽器博物館)⁶³が設置されているが、図書館との間に緊密な連携は見られない。

(財)日本近代音楽財団日本近代音楽館は1987年10月、明治期以降の日本の音楽家と作品資料のアーカイブとして設立された典型的なL+Aの機関であった。日本近代音楽館は山田耕筰をはじめ、日本を代表する多くの作曲家の作品の自筆譜、筆写譜、その他の関連資料を中心に収集していた。日本近代音楽館の前身は遠山音楽財団附属図書館であったことから、日本の洋楽資料専門の図書館としての機能も併せ持つ運営がされていた。しかし、2010年3月をもって閉館され、それを機にMLAJを退会した。閉館後は全資料が明治学院大学図書館に移管された。明治学院大学では2011年5月に図書館附属の日本近代音楽館として再オープンするとのことであるが、現時点(2011年1月)では詳細不明である。

L+Mに該当する機関は民音音楽博物館⁶⁴、新冠レ・コード館⁶⁵などがこれにあたる。民音音楽博物館は1974年に民音音楽資料館(図書館)として開設された。その後、楽器やオルゴールの収蔵が増加したことで、2003年、東京都の登録博物館として申請認可された⁶⁶。ここには、明治以降の洋楽関係の図書・逐次刊行物、楽譜、録音資料のほか、親機関の民主音楽協会が現代作曲家に委嘱した手稿譜も所蔵されている。民音音楽博物館は歴史的鍵盤楽器、歴史的オルゴール、民族楽器のコレクションを充実させ博物館的機能を前面に押し出した運営をしてい

るが、現在でも設立当初の図書館としての機能も果たしている。北海道の新冠町立レ・コード館は、ふるさと創生基金を活用した町おこしの一環として1990年に構想され、1997年に開設された施設である。全国の愛好家などから寄贈されたSPレコード、LPレコード等70万枚を超える歴史的音盤を収蔵し、再生装置を備えた博物館として運営されている。また同時に町立図書館の機能も果たしている。

Mタイプとしては金沢蓄音器館⁶⁷が挙げられる。金沢蓄音器館は、金沢市が株式会社山蓄から蓄音器540台、SPレコード2万枚の寄贈を受け、2001年に開設した博物館である。MLAJの加盟機関の中では唯一のMタイプである。

5.2 「日本の音楽資料」

文化庁は2005年度から「音楽資料・情報の保存及び活用に関する調査研究」を文化行政の重点項目として予算化し、調査研究を委託している。これは2001(平成13)年に成立した「芸術文化振興基本法」⁶⁸と閣議決定された「基本方針」⁶⁹に基づくものである。

一連の施策として、ニッセイ基礎研究所が受託した調査研究の2005年度と2006年度の報告書⁷⁰に基づき、2007年度から「歴史的音盤アーカイブ推進協議会(HiRAC)」⁷¹のSPレコードのデジタル化を助成している。HiRACは日本放送協会(NHK)、社団法人日本音楽著作権協会(JASRAC)、社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協)、財団法人日本伝統文化振興財団、特定非営利活動法人映像産業振興機構(VIPO)一般社団法人日本レコード協会(RIAJ)の6団体による組織である。HiRACによってデジタル化された歴史的音盤のデータは国立国会図書館に納入され、近い将来、国立国会図書館で公開されることになっている⁷²。

また、文化庁は2009年度、日本音楽学会、音楽図書館協議会、IAML日本支部のメンバー6名から成る「日本の音楽資料」調査委員会の「日本の音楽資料のデータベース化のための調査」プロジェクト等を助成した⁷³。「日本の音楽資料」プロジェクトでは、1)日本人作曲家の手稿譜、2)1945年以前に我が国で出版された楽譜、3)西洋音楽の手稿譜、4)1900年以前に欧米で出版された楽譜の所蔵状況を調査した。「日本の音楽資料」調査委員会は全国469機関を対象として上記の音楽資料の所在・内容調査を行った。調査結果の報告書⁷⁴には、回答を寄

せた全国の160の機関が所蔵する20,807点の楽譜の所在が掲載されている。その内訳は、日本人作曲家の手稿楽譜が4,693点、1945年以前に我が国で出版された印刷楽譜が11,889点、西洋音楽の手稿譜が705点、1900年以前に外国で出版された印刷楽譜が3,520点である。「日本の音楽資料」調査委員会の構成は、RISMと似てはいるが、調査対象機関となった図書館、博物館その他の施設はこのプロジェクトに主体的に参加した訳でない。

5.3 我が国におけるMLA連携

田窪は“MLA連携を推し進めている一番の要因”として、デジタル技術とコンピュータ・ネットワーク環境の発展・普及を挙げている⁷⁶⁾。こうした認識は一般化しているが、安江はこれに加えて「災害対策」を挙げている⁷⁶⁾。本稿の冒頭で触れたアート・ドキュメンテーション学会のシンポジウムではMLA連携が必要とされる要因について次のような指摘がされた。入江は“紙の時代のMLAは、ILLの連携と資料保存、目録標準化が主な目標であった”こと、インターネット時代は“インターネット上で情報公開されていないと、その存在自体が認識されなくなる恐れ”からMLA連携が問題視されていると指摘している。また、“MLA連携により、文化資産や知をインターネット世界へ複製し、それを基盤として、インターネットの情報を豊かにしていくための構造を構築する一方、インターネット上の情報の信頼性を現実の資料で補完していく仕組み”を構築することが重要だと指摘している⁷⁷⁾。

八日市谷は“利便性向上のための情報技術の活用、利用者層の一般化（ネット利用）、付加価値の創出、情報空間におけるMLAの危機感”を挙げている。MLA連携が取り組むべき基本的な課題としては“書誌情報や記録史料記述情報等”の“情報項目や情報取得内容”と“情報連携のための相互互換性の確保”などの標準化という「基本的情報連携：テクニカルな連携」が必要であると主張している。また、各機関が“包括的にデジタルリソース化”をすることと共に貴重資料など特定資料のデジタルリソース化を並行して行なう“選択的情報連携：コンテンツ連携”が重要だと指摘している。それらの結果を“ネット上のポータルで連携させて”一般利用者に提供して行く方式のMLA連携が合理的だとしている⁷⁸⁾。

これらの主張はいずれも重要なポイントを突いている。我が国におけるMLA連携の論議は多くの場

合、M・L・Aを運営する側から提起され、利用者側から提唱されることは少ないと思われる。IAMLのR-Projectsの提唱者には音楽学者や音楽図書館員など主題を研究する立場から、研究環境の整備を目的とし、MLA連携の先に研究課題を見据えている点が我が国のMLA連携の動きとの違いである。

6. 結びにかえて(提言)

IAMLのR-Projectsの成立と活動の展開は、我が国におけるMLA連携を進める際の3つのヒントを与えているように思われる。第1のヒントは、R-ProjectsはMLA連携を単に情報のデジタル化によるMLAの境界喪失に直面した組織活動の新展開として進められたのではないことである。第2のヒントは、特定主題分野における研究振興を目的として、研究者を交えた活動がR-Projectsの動機付けと活動を活性化させていることである。第3のヒントは、R-Projectsはプロジェクトを研究対象と成り得る素材や原典資料に設定したことにより、研究者の積極的関与を引き起こしていることである。

R-Projectsに学んで、我が国におけるMLA連携をより進展させるためには次のポイントを考え、実施することが必要であると思われる。

- 1) MLA連携をテーマとするディスカッションは特定の分野のMLA連携をテーマとし、その場には特定分野の学会、研究者を引き入れること。
- 2) 管理側ではなく研究者側の視点でテーマを設定すること。
- 3) MLAの若手スタッフと若手研究者を対象とした次世代人材育成プログラムを策定すること。
- 4) 次世代人材育成プロジェクトをMLAと学会とで協同運営すること。
- 5) 既に稼働しているMLA国際的ジョイント・プロジェクトへの参加を促進し、成功事例から学ぶこと。
- 6) MLA連携に関する情報交流を緊密にするためニューズレターやメーリング・リストを実現すること、などである。

図書館界でもMLA連携に備えた次のような動きを起こす必要があろう。

- a) 館内にあるA資料の存在確認とリスト作成。
- b) A資料の扱い方に関する基礎講座の開催。
- c) A資料のメタデータ化、デジタル化に関する講習会の開催。

- d) 館内にあるA資料に関する扱いについて中長期計画の策定。
- e) A資料のデジタル化とメタデータの作成及び公開、などである。

情報のデジタル化と情報通信技術の進展は、人々の情報行動に大きな変化をもたらしていることは事実である⁷⁹⁾。また、入江の指摘するような図書館の存在理由の喪失の危機すら見え隠れしている⁸⁰⁾。その意味でMLA連携の早期実現はMとLとAの境界を越えた存在理由の証明としても急ぐべきと思われる。特に、重要な点は、MLA連携はそれぞれの機関の管理運営からではなく、また、議論に止まることなく、研究対象となる資料の組織化という視点から考えなおす必要がある。

引用・参考文献

- 1) 2009年12月4日、5日の両日、東京国立博物館平成館で開催された。アート・ドキュメンテーション学会の創立20周年記念フォーラム。展示会出展機関等によるプレゼンテーション、「日本におけるMLA連携の現状と課題」をテーマとした発表とパネル・ディスカッション、佐々木丞平(京都国立博物館長)、長尾真(国立国会図書館長)、高山正也(国立公文書館長)による記念鼎談「これからのMLA連携に向けて」、シンポジウム「日本のアート・ドキュメンテーション---20年の達成とJADS」など多彩なプログラムで行なわれた。フォーラムの記録は、水谷長志編著『MLA連携の現状・課題・将来』勉誠出版、2010、296p.として出版された。
- 2) 田窪直規「MLA連携の動向とこの連携を捉える3つの視点」水谷長志編著、前掲1)、p.88。
- 3) 前掲2)、p.110。
- 4) IAML Joint projects and assisted publications http://www.IAML.info/activities/joint_projects (参照 2011-01-20)
- 5) 岡野裕之「文学館の自己認識とその領域」『文学館研究』No.1,2009.10,p.1-16。
<http://literarymuseum.net/paper/jlm-1.pdf> (参照 2011-01-19)
- 6) Seeger, Charles "Prescriptive and Descriptive Music Writing," *Studies in Musicology 1935-1975*. University of California Press. 1977. p.169-181.
- 7) 武満徹『夢と数；音楽の語法』リプロポート、1987、93p.
- 8) エアハルト・コルコシュカ著 入野善朗訳『現代音楽の記譜』全音楽譜出版、1978、187p.
- 9) 松下鈞「AVライブラリーからMediathèque」『情報通信とドキュメンテーション・センター；日仏の現状と展望』日仏図書館学会、1992.p.41-47.
- 10) British Library OPAC Finding Music: Printed Music. <http://www.bl.uk/reshelp/findhelprestype/music/findmusic/findprintedmusic/findprintedmusic.html> (参照 2011-01-20)
- 11) 例えば、ショパン (F.Chopin) のピアノ作品にはパデレフスキー (Paderewski) 版、コルトー (Cortot) 版、クロイツァー (Kreutzer) 版など校訂者の名前で通用している楽譜がある。
- 12) Alec Hyatt King. "Eitner, Robert," *New Grove dictionary of music and musicians*. 2nd ed., vol.8, London, MacMillan, 2001, p.43-44.
- 13) Eitner, Robert. "Lexikon der holländischen Tondichter" 未刊.
- 14) <http://www.musikforschung.de/> (参照 2010-01-24)
- 15) "Monatshefte für Musikgeschichte", 1869-1905 http://de.wikisource.org/wiki/Monatshefte_f%C3%BCr_Musik-Geschichte (参照 2011-01-24) <http://www.archive.org/details/MonatshefteFrMusik-geschichte1869-1905> (参照 2011-01-24)
- 16) "Publikationen Älterer Praktischer und Theoretischer Musikwerk" http://imslp.org/wiki/Publikation_%C3%A4lterer_praktischer_und_theoretischer_Musik-Werke (参照 2011-01-24)
- 17) "Bibliographie der Musik-Sammelwerke des XVI. Und XVII. Jahrhunderts" Berlin (参照 2011-01-25)
- 18) "Biographisch-bibliographisches Quellen-Lexikon der Musiker und Musikgelehrten der christlichen Zeitrechnung bis zur Mitte des neunzehnten Jahrhunderts", Leipzig, 1900-1904 <http://www.archive.org/details/biographischbibl07eitn> (参照 2010-01-25)
- 19) Daniel Heartz. "The Répertoire International des Sources Musicale," *Journal of the American Musicological Society*. 14(2), 1961, p.268-273.
- 20) Friedrich Chrysander. "Abriss einer Geschichte des Musikdruckes von Fünfzehnten bis zum neunzehnten Jahrhundert," *Allgemeine Musikalische Zeitung*. 14 Jahrgang, Nr.11-16, 1879. に所載
- 21) Eitner, Robert. "Buch und Musikalienhändler, Buch und Musikalien Drucker, nebst Notenstecher, nur die Music betreffend, nach den Originaldrucken verzeichnet" *Monatshefte für Musikgeschichte, Beilage zu den Monatsheften für Musikgeschichte*, Jahrg. 36, 1904, p.248.
- 22) Eitner, Robert. "Nachträge zu Eitners Quellen Lexikon," *Monatshefte für Musikgeschichte*. Jahrgang 17, 1905, IIIp.1-59.
- 23) Alfons Ott. "Ludwig Kinsky," *The New Grove dictionary of music and musicians*. 2nd ed., vol.13, London, MacMillan, 2001, p.617.
- 24) Hans E. Eggerecht. "Wolfgang Schmieder" *The New Grove dictionary of music and musicians*. 2nd ed., vol.22, London, MacMillan, 2001. p.541.
- 25) Robert N. Freemann. "Bach Revival" *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed., vol.1, London, MacMillan, 2001, p.438-442.
1829年、メンデルスゾーンが20歳の時、演奏指揮したバッハの「マタイ受難曲」がセンセーションを起こし、1750年に亡くなった後は忘れられていたバッハの作品が再評価されるきっかけとなった。
- 26) Harold E. Samuel. "Musicology and the music library" *Library Trend*. 1977(April), 1977, p833-846.
- 27) IAML (<http://www.iaml.info>) IAML 日本支部 (<http://www.iaml.jp>) (参照 2011-01-29)

- 28) Harald Heckmann. "Half of century" IAML History. http://www.iaml.info/organization/what_is_iaml/history (参照 2011-01-19)
International Association of Music Libraries として組織された IAML は、その後、名称の末尾に Archives and Documentation Centres を加えている。また、ここから録音資料を専門とする機関から成る、IASA (International Association of Sound Archives)、作曲家や作品、演奏家などの情報を扱う音楽情報センターなどの組織からなる IAMIC (International Association of Music Information Centres) が派生して設立された。
- 29) <http://www.rilm.org/> (参照 2011-01-19)
- 30) <http://www.ridim.org/about.php> (参照 2011-01-19)
- 31) <http://www.ripn.org/> (参照 2011-01-20)
- 32) 前掲 28)
- 33) 前掲 28)
- 34) RiDIM のホームページの About RiDIM <http://www.ridim.org/about.php> (参照 2011-01-31)
によれば、IAML からは Vladimir Fedorov, Richard S. Hill, A. Hyatt King, Leopold Novak, Nino Pirrotta, IMS からは Higinio Angles, Friedrich Blume, Albert Smijers らによって委員会が構成された。
- 35) IAML Joint projects and assited publications. http://www.iaml.info/activities/joint_projects#RISM (参照 2011-01-20)
- 36) Kinsky, Georg. *Geschichte der Musik in Bildern*. Leipzig, Breitkopf und Härtel, 1929, 364p.
- 37) Michael Praetorius. *Syntagma Musicum*. 3 vols, Wittenberg 1614-19, rep. ed., Kassel, Bärenreiter, 1959-1978.
- 38) Lavignac, Albert. *Encyclopedie de la musique et dictionnaire du conservatoire*, 11 vols, Paris, C. Delagrave, 1913-22.
- 39) Carl Dahlhaus, Hans H. Eggebrech. *Brockhaus Riemann Musiklexikon*, 2 vols. Mainz, Brockhaus/Schott, 1978-79.
- 40) Sadie, Stanley. *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 29 vols, London, MacMillan. 1980.
- 41) Heckmann, Harald. "Summary of the proceedings ; introductory remarks," *Notes*. XXVII(4), 1972, p.653.
- 42) E. パノフスキー著 浅野徹 [ほか] 訳, 『イコノロジー研究』上・下, 筑摩書房 (ちくま学芸文庫), 2002.
- 43) Hugo Leichtentritt. "Altäre Bildwerke als Quellen der musikgeschichtlichen Forschung," *Bericht über den zweiten Kongress der Internationalen Musikgesellschaft zu Basel 1906*. Basel, Breitkopf u. Härtel, 1907, p.230-34.
- 44) Daniel F. Scheurleer. "Iconography of musical instruments," *Zeitschrift der Internationalen Musikgesellschaft*. XII, Heft 11, 1910, p.305-309.
- 45) Albert G. Hess. "The Cataloguing of music in the visual arts" *Notes*, XI, 1954-55, p.527-542.
- 46) ICOM=CIMCIM <http://icom.museum/who-we-are/the-committees/international-committees/international-committee/international-committee-for-museums-and-collections-of-musical-instruments.html> (参照 2011-01-20)
- 47) Barry S. Brook. "RiDIM : A new international venture in music iconography," *Notes*. 27/4, 1972, p.652-663.
- 48) About RiDIM. <http://www.ridim.org/about.php> (参照 2011-01-20)
Barry S. Brook et al. "RiDIM Inaugural report," *Fontes Artis Musicae*. vol.19, 1972, p.196-206.
- 49) Erich M. von Holnboester & Curt Sachs. "Classification of Musical Instruments" *ETHNOMUSICOLOGY an introduction*, ed. by Helen Myers. London, MacMillan, 1992, p.444-461. これは C. Sachs の "Systematik der Musikinstrumente : ein Versuch" *Zeitschrift für Ethnologie*, 46(1914), p.553-590 の英訳
- 50) Barry S. Brook. "RiDIM : A new international venture in music iconography," *Notes*. XXVII/4, 1972, p.659-663.
屋部操「国際音楽図像目録のプロジェクトについて」『塔』Vol.23, 1983, p.111-127.
- 51) RiDIM の本部事務局はパリの CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique) の Recherche cooperative sur programme de Centre National de la Recherche Scientifique として設置された。
- 52) http://www.RidIM.org/commission_mixte.php (参照 2011-01-20)
- 53) IAML constitution <http://www.iaml.info/en/organization/governance/constitution> (参照 2011-01-20)
- 54) 音楽図書館協議会 <http://www.mlaj.gr.jp> (参照 2011-01-20)
- 55) 前掲 5)
- 56) 大阪音楽大学音楽博物館 <http://www.daion.ac.jp/museum/> (参照 2011-01-20)
- 57) 大阪芸術大学博物館 <http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/museum/> (参照 2011-01-20)
- 58) 東京藝術大学小泉文夫記念資料室 <http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/> (参照 2011-01-20)
- 59) 国立音楽大学附属図書館 <http://www.lib.kunitachi.ac.jp/> (参照 2011-01-20)
- 60) 武蔵野音楽大学図書館 <http://www.musashino-music.ac.jp/gakuen/facilities/library/index.html> (参照 2011-01-20)
- 61) 国立音楽大学附属図書館ベートーヴェン初期印刷楽譜目録 <http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/cat/cat.html> (参照 2011-01-20)
- 62) 国立音楽大学附属図書館貴重書目録 西洋編 1850 年以前 (<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/collection/toku/yosho/top.asp>) (参照 2011-01-20)
- 63) 国立音楽大学楽器学資料館 <http://www.kunitachi.ac.jp/organization/museum.html> (参照 2011-01-20)
- 64) 民音音楽博物館 <http://museum.min-on.or.jp/top.html> (参照 2011-01-20)
- 65) 新冠レ・コード館 <http://www.niikappu.jp/record/> (参照 2011-01-20)
- 66) 民音音楽博物館 History of Min-on vol.3 民音音楽博物館の歴史～「民音音楽資料館」から <https://www.min-on.or.jp/history/history03-05.html> (参照 2011-01-30)

- 67) 金沢蓄音器館
<http://www.kanazawa-museum.jp/chikuonki/> (参照 2011-01-20)
- 68) 芸術文化振興基本法
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H13/H13HO148.html>
 (参照 2011-01-20)
- 69) 文化庁「文化芸術の振興に関する基本的な方針」『文化庁月報』412号, 2003.1, p.12-23.
- 70) ニッセイ基礎研究所『音楽情報・資料の保存及び活用に関する調査研究[報告書]2005年度』, ニッセイ基礎研究所 2006.3, 33, 13, 61, 29, 57, 41, 『同 2006年度』ニッセイ基礎研究所, 2007.3, 63, 31, 27, 43, 39, 35p.
- 71) レコード協会プレスリリース「歴史的・文化的資産であるSP盤及び原盤の音源保存のため、歴史的音盤アーカイブ推進協議会 (HiRAC) 設立」
<http://www.riaj.or.jp/release/2007/pr070427.html>
 (参照 2011-01-20)
- 72) 特別座談会「文化資産を守る～アーカイブ事業の意義と役割」『The Record』 Vol.594, 2009.05.
<http://www.riaj.or.jp/issue/record/2009/200905.pdf> (参照 2011-01-20)
- 73) <http://www.musicology-japan.org/top/news/OngakuShiryō>
 Research.pdf (参照 2011-01-20)
- 74) 「日本の音楽資料」調査委員会編『日本の音楽資料』のデータベース化のための調査；報告書』日本音楽学会, 2010, 60p.
- 75) 田窪直規「博物館・図書館・文書館の連携, いわゆるMLA連携について」日本図書館情報学会研究委員会編『図書館・博物館・文書館の連携』(シリーズ図書館情報学のフロンティア No.10), 勉誠出版, 2010, p.2.
- 76) 安江明夫「文化資源機関の保存マネジメント」前掲74)
- 77) 入江伸「大学図書館からのMLA連携の視点」水谷長志編著, 前掲1), p.39-50.
- 78) 八日市谷哲生「国立公文書館におけるデジタルアーカイブ化の推進と情報連携の取組等に関して」水谷長志編著, 前掲1), p.63-76.
- 79) Healy, Leigh-Watson. “The Evolving Content User : How Libraries will need to adapt to serve a new kind of patron. *KIT-CLIR International Roundtable for Library and Information Science* : KIT-LC 2004 Preliminary highlights presentation to UW Libraries Council on July 26, 2007.
<http://www.lib.washington.edu/assessment/surveys/survey2007/default.html> (参照 2011-01-20)
- 80) 前掲77)